

『第9回砺波市美術協会員展・安城文化協会交流展について』

会期 3月9日(土)～4月7日(日)

砺波市美術協会 会長 山勢慶三

例年の砺波市文化祭行事に参加して行われる砺波市美術協会員展は、今年は砺波市文化協会の肝煎りで、安城文化協会との交流活動で夜高・芸能・文芸等の取り組みに続く、美術交流活動として、取り組めます。日本画をはじめとする安城文化協会・会員のみなさまの作品を、5部門に渡って当会員作品と同列に飾らせていただくことになりました。

これまでのトルコ・オランダ友好美術展とは一味違った展覧会になりそうです。

当協会として新たに始まるこれからの友好交流美術展に大きく拡がって行くための一歩として努力していく所存です。

私たち協会としては、突然の交流話で、安城市について少しは知らなければと、勉強したことについて書きますと、愛知県中南部、岡崎平野の中央部に位置し、明治24年(1891)東海道本線安城駅が設置されて、駅を中心に発展したそうです。地域全体としては、明治14年、明治用水が開通してからできた町でもあり、日本のデンマーク農村と称される先進農業地帯として発展してきました。戦後は自動車産業の発展に伴い、関連機械工業の増加する地域として、昭和63年(1988)には新幹線の三河安城駅が設置されるなどで、農業と工業が共存する都市のようです。また芸能文化については、無形民俗文化財として有名な三河万歳の発祥の地でもあります。

昭和27年(1952)市制施行され、現在15万人の人口を容すと聞いています。私たちの市と比較すると、人口が3倍ぐらいの大きな地方都市です。これからの安城文化協会と私たち砺波市美術協会と会員相互の交流をどのよう計ってゆくのか。美術交流の今回の展覧会の取り組みを、実りあるものにする事で、次の交流展の展望を開きたいものだと思います。その為にお互いをまず知り合うことから始めたいものです。



観覧無料

2013となみチューリップフェア特別展『土門拳の昭和』

会期 4月13日(土)～6月2日(日)

砺波市美術館学芸員 末永忠宏

「昭和」の姿を写真に収め、観る人々へ多大な啓発を促した報道写真家・土門拳(1909-90)。強いメッセージ性を持った土門の写真論はアマチュア写真家たちを鼓舞し、以後の日本写真界に大きな影響を与えました。本展は土門の写真人生をふり振り返りつつ、彼が捉えた「昭和」の写真作品300点を展示します。第一線で活躍した日本人写真家の写真芸術に加えて、昭和史の重要場面に触れるという、幅広い文化を体感していただける機会となることでしょう。



江東のこどもより「近藤勇と鞍馬天狗」1955

- 編集後記 -

年が明けて、美術館に砺波市美術協会宛で葉書が届きました。「砺波総合病院に入院中のものです。今まで健康に自信があったのに、急に2か月入院することになってしまいました。楽しみが院内の散歩で、「おあしすギャラリー」をじっくり見ていました。書は、ぜんぜんわかりません。でも、「徳は孤ならず必ず隣りあり」という言葉に、思わず涙がでるほど暖かい気持ちになりました。ほんとうだなーって思ったので。本当に、ありがとうございます。」一月の作家は平木雲龍さんでした。(0)

エプロンで運ぶサラダは春キャベツ 増田明美(元マラソン選手)